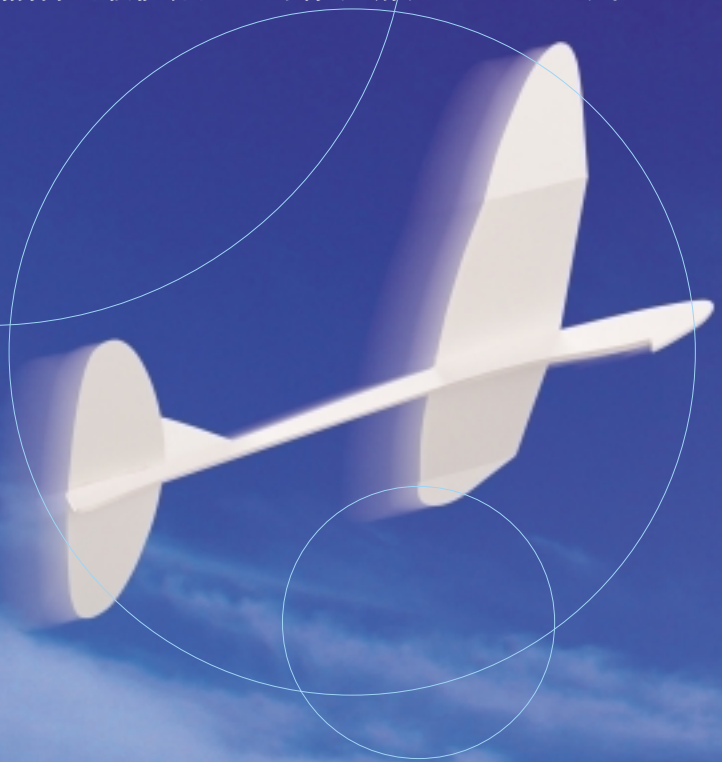
時代は、国際文化交流の重要性に期待の声を寄せています。ジャパンファウンデーションは大改革の一年を経て、時代の要請に応えることができる組織となりました。

グローバリゼーションが進む現代、国際社会のさまざまな垣根が低くなり、市民にとって文化交流はますます身近なものとなりつつあります。一方で、引き続く地域紛争や地球環境の悪化など、世界情勢には不安定な側面もあります。戦後60年を経て、なお溶解しないわだかまりの問題も無視できません。はたして「文化交流」や「対話」、あるいは「文化」そのものは、世界の平和と安定の実現のために役にたつのであろうか――そのような疑問を抱かれている方もいると思います。

私たちジャパンファウンデーションは、文化という国際財を通じ、人と人の交流によって相互理解と対話を促進してきました。交流を重ねることで、人々はそれぞれの文化がもつ精神性や価値観をいっそう深く理解することができます。こうした経験の蓄積が、自らの文化をも豊かにし、同時に相手への尊敬と信頼感へとつながっていくことを、私たちは体験してきています。

ジャパンファウンデーションは、こうした国際文化交流を専門的に実施する準公的機関として、ある分野では交流のカタリスト（触媒）として、またある分野では自らがプレイヤーとして、過去30余年にわたり活動してきました。

2004年度は、私たちにとって改革の年でした。独立行政法人となって私たちが優先的に取り組んだのは、事業、運営そして人事の面などでの大規模な改革を断行することでした。それは、国際文化交流の重要性に対する時代の要請に応えるためでもありますが、同時にこれまでの事業を、さらに内容を充実させながら、より効果的にかつ効率的に



実施するために他ありません。

改革の詳細については、本年度から体裁を変え、読みやすくリニューアルした本書をめくって確かめてください。第1段階の改革から1年を経たいま、これらの改革の成果が少しずつ着実に目に見えはじめたことを、本書で報告できることをうれしく思います。

ジャパンファウンデーションはこうした努力をさらに継続しつつ、新しい課題にも挑戦し、国際交流に従事される内外の方々のご要望に応えていくために鋭意努力していきます。

2005年10月

国際交流基金
（ジャパンファウンデーション）
理事長　小倉 和夫

■イントロダクション

理事長メッセージ 1
機構改革について 2
JFのアイデンティティ 4
JFの2004年度を振り返る 6
数字で見るJF 8

■文化芸術交流

2004年度活動カレンダー 10
メイントピックス 12

■海外における日本語教育

2004年度活動カレンダー 20
メイントピックス 22
日本語国際センター・関西国際センター 26

■日本研究・知的交流

2004年度活動カレンダー 28
メイントピックス 30
日米センター 34

■海外ネットワーク

活動報告 36

■情報提供・国内連携

情報提供 42
顕彰事業 44
国内連携 46
JFサポーターズクラブ 48

■財務・組織・統計

財務諸表 50
重要な会計方針 54
民間からの資金協力 56
組織 58
連絡先一覧 60
地域別活動内容構成比 62
事業実績上位20カ国 64

機構改革について

より効率的で力強い組織をめざし、多角的な改革に取り組んでいます。

激動する国際社会のなか、ジャパンファウンデーションは、日本と日本人が持つ文化の力を世界の市民と文化のために活かし、これまで以上に力強く貢献していくために、よりしなやかで実行力ある組織をめざして生まれ変わりました。機構から事業・運営面までの大幅な改革を行ない、機能的で開かれた組織として数々の施策を実行しています。国内外から寄せられている大きな期待にお応えするために、全力で取り組みます。

3事業部門に再編した「機構の改革」

柱となる事業部門を大きく3つの「グループ」に再編し組織のスリム化も実現。それぞれがめざすべき達成目標（ワーキング・ミッション）を明確にすることで活動内容を効率化・集約化し、効果を握握しながら事業展開できる体制を作りました。ジャパンファウンデーションは、この大規模な機構改革に基づき、3グループが担当する各分野で求められる多岐にわたるニーズに柔軟に対応。新設された情報センターの情報提供力により連携を強化しながら、私たちだからこそできる先駆的で公共性の高い国内外の文化交流事業を実施していきます。

文化芸術交流グループ

日本の伝統文化はもちろん、いま国際的な注目を集めるポップカルチャーを含めた現代日本の多様な文化的魅力を海外に発信。内外の芸術家・文化関係者の新しい交流の場をつくり出しています。

日本語グループ

海外で日本語を学習する人、教える人のさらなる拡大をめざし、日本語専門家の海外派遣、日本語能力試験の実施、外国人日本語教師の訪日研修など、総合的な日本語支援事業を展開しています。

日本研究知的交流グループ

国際的な対話の場や研究促進を通じ日本社会の実像を海外に伝えることでステレオタイプな日本像を変革。また、地球規模の課題解決や文明間の対話など国際的な知的ネットワークも形成しています。

分かりやすく効率的に「事業の改革」

国・地域別の事業実施体制の強化

海外ニーズを把握し目的を明らかにしたうえで、対象となる国・地域別の成果目標を定め事業を実施。そのために理事の業務分担を「事業分野」担当制から「地域」担当制に変えました。

事業の選択と集中

プログラム・メニューを削減し、対外的に分かりやすく多様なニーズへの柔軟な対応を可能にしました。３年以上の継続助成は原則として中止し、存廃評価を行なったうえ真に必要な事業のみを継続します。

効率化の視点で見直す「運営の改革」

2006年度までに管理費１割削減をめざし2004年度は次の効率化施策を実施しました。

経費削減

定年退職者の補充採用中止などで人件費削減。京都支部とシドニー事務所を移転、本部事務所の統合縮小などで事務所借料削減。一括入札方式などによる事務経費効率化。

自己収入の拡充

外貨建債権の取得による運用収入の確保や寄付金収入拡充。海外の日本語能力試験受験料の収入増。他団体との事業共催などを通じ外部資金導入と経費節約。

開かれた国際交流基金へ「新規導入・登用」

海外での知名度に比べ、事業内容の国内認知度が低かったジャパンファウンデーション。もっと身近で親しみのある、開放的で風通しのよい組織へ改善する試みを実施しています。

- 海外事務所長（北京）を公募
- 国際文化交流ボランティア制度の導入
- 国際交流基金友の会をJFサポーターズクラブへ改編
- 「先駆的・創造的事業枠」を設置し職員からアイディア公募
- 事業や運営に関する評価委員会を設置
- 外部団体と積極的な人事交流
- 情報センター部長を民間から登用

情報センター

定期刊行物『遠近（をちこち）』やWebなどを通じ、国際交流に関する内外情報を提供。海外事務所を活用しながら交流の担い手となる方々と海外情報を交換、さらに事業の仲介・連携強化を促進します。

わたしたちの新しい「ロゴマーク」を紹介します。

機構改革に際して、ジャパンファウンデーションの役割とわたしたちの決意を
あらためて皆様にお伝えしたく思い、新しいロゴマークを作りました。

JAPANFOUNDATION

シンボルマーク

私たちは日本文化の魅力を発信し、世界の人々と共感し、理解しあえる国際交流のしごとを進めていくために、
世界に飛翔するカタリスト（触媒）でありたいと思います。

●モチーフはJとF
シンボルマークはjとfの小文字の組み合わせです。活字体ではなく筆記体とすることで、柔軟で親しみのある文化の送り手としての姿勢を示します。

●コンセプトはしなやかな飛翔
しなやかな美しさは、無知や偏見からの自由、国境や文化を超えた相互理解や知的創造に必要なダイナミズムを表しています。

●フォルムは蝶
蝶のようなフォルムの中心は日本です。中心から出て再び中心へ戻ってくる柔らかなフォルムは、日本の文化・芸術・ことば・思想を世界のすみずみまで届け、また世界の多様な文化・芸術・ことば・思想を日本へ伝えたいという循環性を表現しています。

●カラーは紫
紫は創立以来、私たちのシンボルカラーです。継続して使用してまいります。

基金からJFへ

これから私たちはJapan Foundationとして内外の方々に共通の認識をもっていただきたいのです。
この呼称とjとfのシンボルマークを一体化して私たちは発信していきます。

ジャパンファウンデーションの歩み

1970年前後、日本の急速な経済成長にともなって文化面での日本の発信能力を強化していく必要性が認識されるようになりました。1972年1月、福田外務大臣（当時）は、大規模な基金を有し、かつ強力な実施組織を備えた文化交流機関として、国際交流基金を設立する構想を発表しました。これを受けて同年、国際交流基金（The Japan Foundation）が外務省所管の特殊法人として発足しました。その後、2003年10月に独立行政法人化し、現在に至っています。
設立当初、基金の運用資金は約50億円でしたが、その後、政府からの追加出資が行なわれ、2003年10月1日の独立行政法人への移行時の政府出資金は約1,110億円です。その運営は、政府からの運営費交付金、政府出資金の運用益、国際交流基金フォーラムの運営、日本語能力試験等を通じた自己収入および民間からの寄附金等により賄われています。

設立の目的

ジャパンファウンデーションは、「独立行政法人国際交流基金法」という法律のもとで設立されています。文化や言葉、伝統、歴史などあらゆる分野での日本の姿を、世界中の多くの方に伝えることで日本に対する理解を深めてもらい、同時に日々刻々と変わる世界の多様な文化の実状を日本の皆様にお伝えすることで、国際相互理解、異文化交流を促進することを目的として、国内4カ所、海外19カ所の事務所を基点として世界中で活動しています。

独立行政法人国際交流基金法　第3条

独立行政法人国際交流基金（以下「基金」という。）は、国際文化交流事業を総合的かつ効率的に行なうことにより、我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的とする。

JFの2004年度を振り返る

日韓国交正常化40周年を記念し、2005年は「日韓友情年2005」としてさまざまな交流事業が行なわれました（2005年3月までに開催されたもの）。

●日韓友情年スーパーライブ・イン・ソウル

2005年1月28日、オープニングイベントとして「日韓友情年スーパーライブ・イン・ソウル」を開催。本事業は、ポップミュージックを通じて両国民の交流を促すことを目的に実施され、日韓友情年テーマソング「Dance With Me（KOREA/JAPAN Ver.）」（CHEMISTRY&LENA PARK）をはじめトップアーティストが共演、友情年のスタートを飾りました。

●コリアジャパン・ロードクラブフェスティバル ▶48ページ

日韓のDJやバンドの競演、若手アーティストによる展示やパフォーマンスをはじめ、7つのライブハウスでのオールナイトイベントを行ないました。

●開高健記念アジア作家講演会

1990年から行なっている「アジア作家講演会シリーズ」は、開高健氏のご遺族から寄せられた志をもとに毎年アジアの文学関係者を招へいし、アジア文学を多くの方に紹介することを目的とした事業です。14回目となった2004年度は、韓国よりキム・ヨンス氏を招き2月18日の福岡から3月1日の札幌講演まで、全国5都市で開催されました。

日米交流150周年

2004年は日米和親条約が締結されてから150周年に当たる年でした。日米両国は、その出会いから現在に至るまで、さまざまな試練を乗り越えて、政治、経済、文化等あらゆる分野で交流を深め、今日の良好な友好協力関係を築いてきました。2004年を一つの節目として、ジャパンファウンデーションもさまざまな文化交流事業を実施しました。

●日米交流150周年シンポジウム ▶34ページ

2004年4月3日、日米交流150周年委員会と共催で、横浜市開港記念会館にてシンポジウム「日米交流の軌跡と展望」を開催。ペリー提督来航と翌年の日米和親条約締結から150年間の日米交流史を振り返り、国際社会の諸問題への対処について考察しました。研究者、行政・外交関係者など400名近くが参加し、大盛況となりました。

●日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム「アジア系アメリカ人の多様性:連帯に向けて」

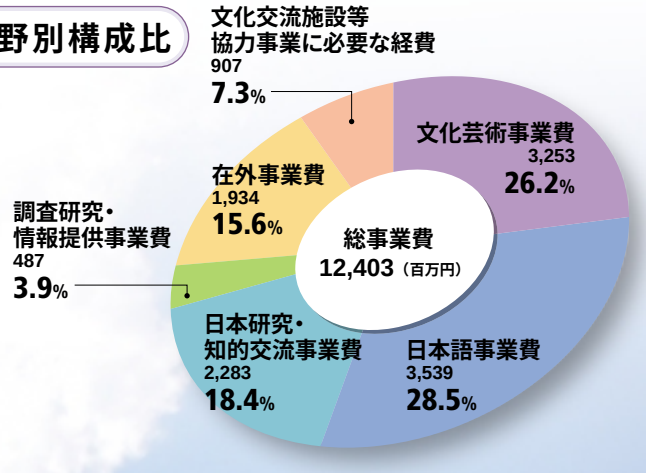
日米センターでは2004年3月27日から4月4日にかけて、日系アメリカ人リーダー13名を招へいしました。本事業は、日系人と日本人の相互理解と、将来の日米関係の強化を目的に実施され、参加者は、歌舞伎や織物など日本の伝統文化に触れるとともに、政治や経済、教育関係者との懇談会を行ない、現代日本への理解を深めました。

●宮本亜門演出作品のブロードウェイ公演 ▶16ページ

宮本亜門氏が日本人として初めて、本場ニューヨークでブロードウェイミュージカル「太平洋序曲」を演出しました。多様な文化的背景をもつアメリカ人出演者たちを演出する難しさを乗り越え、第59回トニー賞の4部門にノミネートされるほどの高い評価を得ました。

日韓友情年 2005

分野別構成比



中東地域との交流強化

ジャパンファウンデーションは2004年度、中東地域との文化交流事業にも力をいれてきました。

●中東派遣ミッション ▶31ページ

2004年9月、「第2回中東地域文化交流・対話ミッション」をヨルダンとイランに派遣し、「伝統と近代」をメインテーマとするシンポジウムを開催しました。また、政策課題について有効な方法論を討議すべく、「日・アラブ対話フォーラム」をはじめ、知的交流の優先的アジェンダの設定を目的とした会合なども実施しています。

●中東映画祭 ▶14ページ

アジア・中東諸国に関する日本人の理解を深めることや日本人のイスラームに対する意識改革を目的に事業を展開しています。2004年度は、国内でのアジア・中東映画の上映に加え専門家によるイラク報道やレバノン映画史をテーマとする講演会を実施。また、初の試みとして在留外国人を対象とした英語字幕付き日本映画の上映会も行ないました。

●イラクからの教員招へい、劇団アル・ムルワッスやウード奏者招へい ▶13ページ

イラク・アラブの文化理解をめざし、2004年10月にはアル・ムルワッス劇団（イラク・バグダッド）公演を、11月から12月にかけてはアラブの伝統的弦楽器「ウード」のコンサートを開催。また、イラクから招かれた中学・高校教員グループは、国内の小中学校での生徒や教員との交流をはじめ、日本の教育に関するレクチャーの受講などを行ないました。

●中東理解講座 ▶18ページ

中東地域およびイスラームに対する関心の高まりを受け、2004年度は「中東理解講座」など8講座を開講しました。メディア報道で注目を集めた分野以外にも日本では馴染みの薄かった中東地域の文化面を重視した幅広い内容設定で、延べ472名が受講。

拡大する日本語教育とジャパンファウンデーションの役割

●日本語教育機関調査の結果発表

2003年度に全世界を対象として実施した「海外日本語教育機関調査」の集計結果を刊行。本調査では、海外127カ国の学校などで日本語教育が行なわれ、約235万人が日本語を学習していることが明らかになり、過去5年で12%の増加が認められました。多くの国において、日本のポップカルチャーに対する関心から、日本語を学び始める若者が増加していることが報告されています。

●意見書の提出

2004年12月1日、ジャパンファウンデーション理事長小倉和夫が、首相官邸において細田官房長官に「世界における日本語教育の重要性を訴える」有志の会が作成した意見書を提出。この意見書は、各界の有識者や著名人をメンバーとするこの会が、日本語教育の必要性を訴えると同時に、国際化社会の中で日本が一層の力を発揮することを目的に作成されました。

数字で見るJF

和太鼓OSAKA打打打団 中東公演

シリア、レバノン、ヨルダン、エジプトの
4カ国をツアー

計8回の公演で **約10,000人の来場**

考古展 ドイツで大盛況

32,000人来館
（会期83日間）

本部フィルムライブラリー

所蔵本数	1102
貸し出し延べ件数	644
上映国数	54
上映都市数	135
延べ上映回数	976

ヴェネチア・ビエンナーレ建築展「おたく」公式カタログ

Amazon.co.jpにおける購入予約が
「ハリー・ポッター第4巻」を超え

1位に

日米交流150周年記念教育プロジェクト
「Snapshots from Japan：7人の高校生の素顔」の
教員用ワークショップを**全米7カ所で開催。**
計116名の教員が参加。

中学高校教員招へい4グループ実施

86カ国から計199人

12月5日全世界同時実施 日本語能力試験受験者数**約30万2千人**

全世界の日本語学習者

127カ国・地域 **235万人**

シドニー日本文化センター図書館来館者数

移転前：平均約**30人**／日 ▸▸▸ 移転後：平均約**80人**／日